

保育者養成校における表現教育の取り組み（４）

An Approach to Expression Education in Early Childhood Teachers Training School (4)

多保田 治 江

要旨

「音楽」の授業で行っている小レポートの分析を通して学生の主体的な学びについて考察を行った。その結果、学生は授業における学びや事後学習の内容を書くという目的があると意欲的に授業を受けることや授業内容を文字化して振り返ることにより理解が深まり、授業態度も変化するなど小レポートが授業に効果的に働いたことが明らかになった。また、グループワークを通して、他者と協働して音楽表現を生み出すことができたことも分かった。

キーワード：主体的な学び(active learning)／音楽表現(music expression)／
事後学習(post-learning)／グループワーク(group work)

I はじめに

小学校・中学校・高等学校の学習指導要領とは違い、幼稚園教育要領¹⁾、保育所保育指針²⁾、幼保連携型認定こども園教育・保育要領³⁾には「教科」という枠組みがない。保育内容を「健康・人間関係・環境・言葉・表現」の5領域としてまとめ、示している。⁴⁾ 領域「表現」と最も関連する小学校の科目が「音楽」である。

領域「表現」の目標は、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」である。⁵⁾

小学校学習指導要領には、教科としての音楽科にかかわる目標と各学年の音楽教育にかかわる目標が示されている。教科としての音楽科にかかわる目標は、「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」である。⁶⁾ 各学年の音楽教育にかかわる目標は各学年とも3項目とし、それぞれ次のような観点に基づいて設定している。⁷⁾

- (1)音楽活動に対する興味・関心，意欲を高め，音楽を生活に生かそうとする態度，習慣を育てること。
- (2)基礎的な表現の能力を育てること。
- (3)基礎的な鑑賞の能力を育てること。

領域「表現」と小学校音楽科は表現する力を育むという点で共通していると言える。小学校の学びは幼児期の学びの上に育まれている。幼稚園・保育所・認定こども園で行われる領域「表現」と小学校低学年の「音楽」の接続について考えることは重要である。

本学の「音楽」（2年 前期 2単位）の授業は、幼稚園教諭一種免許状・小学校教諭一種免許状取得に関連する授業科目として開講している。授業のねらいは、幼稚園教諭や小学校教諭として必要な音楽の基礎的な知識や能力を養うために、様々な表現形態について理解を深め、豊かな感性を育むことを目的としている。

2012年にカリキュラムの変更があり、15回ある授業の後半5回を児童教育コースと幼児保育コースに分けて行うようになった。1年次の「音楽表現Ⅰ」、「音楽表現Ⅱ」を履修し、さらに専門的な学びと表現に対する考えが深まるようにこの「音

TABOTA, Harue

北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科
音楽、音楽表現Ⅰ・Ⅱ、音楽科教育法

楽」の授業を位置づけている。

本論は、「音楽」の授業で行っている小レポートの分析を通して、主体的な学びのための教育方法について論ずることが研究目的である。

II 調査対象と方法

<調査対象>

2016年前期に「音楽」を受講した学生79名を調査対象とした。内訳は次の通りである。

H 大学人間総合学部幼児児童教育学科		
2年生	78名	
3年生	1名	計79名

<調査方法>

小レポートを授業後に提出する。小レポートの内容は、「授業内容」「授業における学びについて」「事後学習について」「質問」(必要に応じて)の4項目を記述するものである。毎回担当者がコメントを書き、次回授業の開始時に返却するという方法で行った。

<調査期間>

2016年4月～7月

III 調査結果と分析

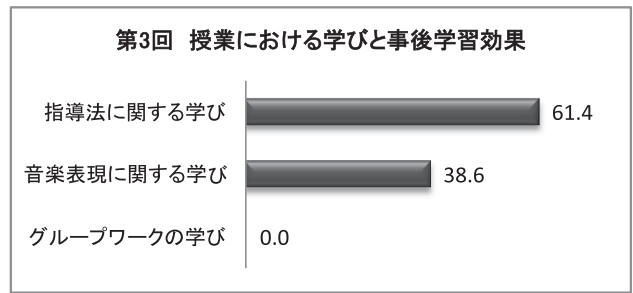
「音楽」の授業回数は前期15回であるが、履修登録が完了した第3回目の授業から小レポートを課した。⁸⁾

「授業における学びについて」は自由筆記であったが、音楽表現に関する学び、指導法に関する学び、グループワークの学びの3つのカテゴリーに分けてグラフを作成した。第8回以降は、事後学習効果の有無も記載されたのでカテゴリーに加えた。

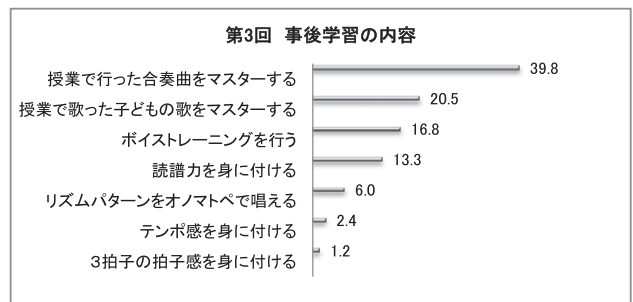
「事後学習について」は記載内容の多い順にグラフを作成した。

各回の「授業内容」と「授業における学びについて」「事後学習について」の分析結果は次の通りとなった。

回	授業内容
第3回	楽典Ⅲ：音符と休符・音程(楽譜の読み方について理解する。)音楽を聴いて演奏したり、楽譜を見て演奏できるようにする。

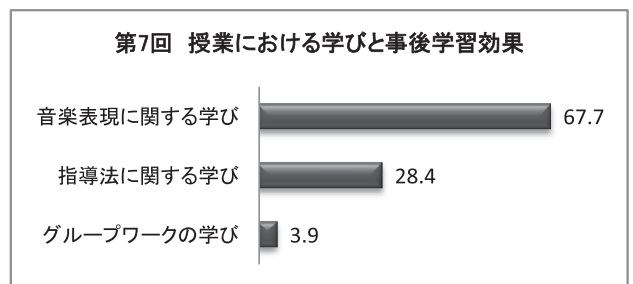


指導法に関する学びでは、歌唱指導に用いる2つの唱法(聴唱法・視唱法)に触れる記載が多かった。音楽表現に関する学びでは、合奏に関する記載が多かった。

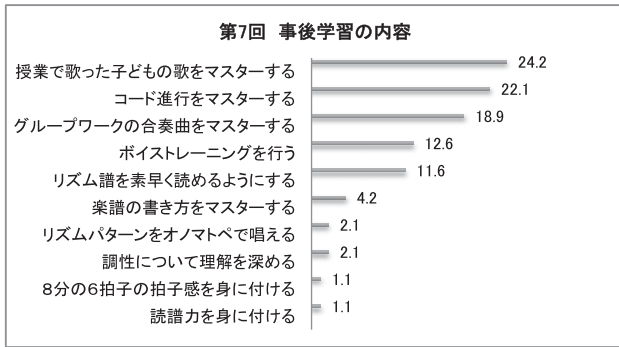


事後学習の内容設定は、授業の学びの中で関心を持った事柄や苦手と感じた事柄の克服に焦点を当てて回答しているように思われた。

回	授業内容
第7回	楽典Ⅳ：音階・和音(楽譜の読み方について理解する。)曲想や音楽を特徴付けている要素を感じ取って、工夫して歌えるようにする。

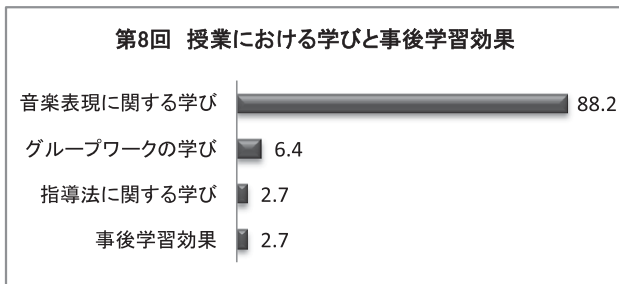


作曲の経験がない学生が多く、「初めての学びであるコードを用いた曲作りが難しい」という記載が多かった。「他のグループの演奏を聴くと新しい発見がある」というグループワークの学びに関する記載も見受けられた。

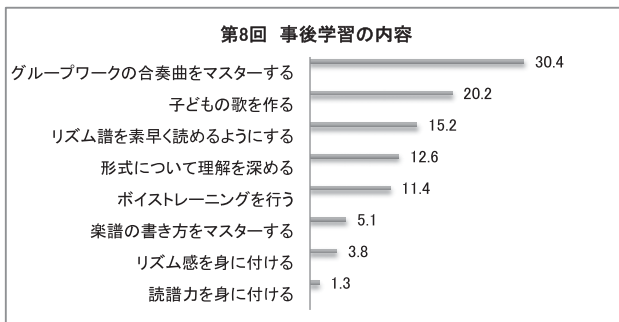


「曲想や音楽を特徴付けている要素を感じ取って歌う」という課題を課したために、約30パーセントの学生が課題を事後学習の内容とした。僅差で、「コード進行をマスターする」が多かった。

回	授業内容
第8回	楽典Ⅴ：楽式（楽曲の構成について理解する。） 曲想や音楽を特徴付けている要素を感じ取って、工夫して演奏できるようにする。



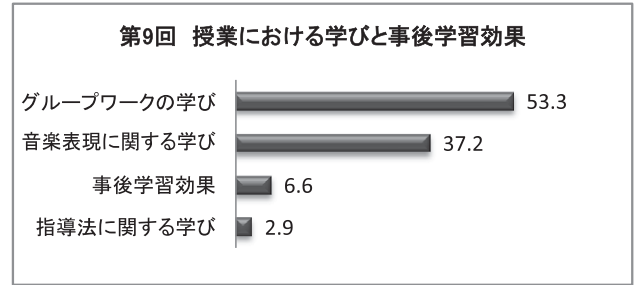
「音楽表現に関する学び」が今回の調査の中で一番多く約90パーセントを占めた。中でも、約80パーセントの学生が「楽式についての学び」を記載していた。事後学習効果を確認するための活動を授業に組み込んでいるが、「ボイストレーニングの成果が表れた。」という回答もあった。



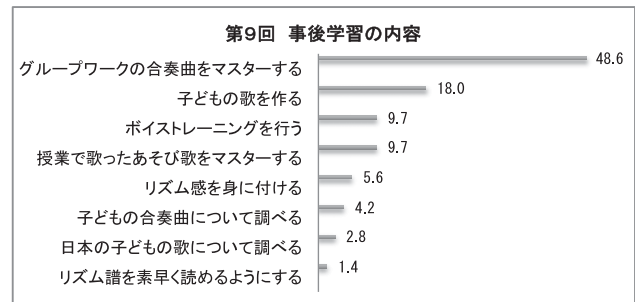
授業では、グループワークで合奏を行い、その

後、各グループの発表を聴くようにした。他のグループの演奏を聴くことが刺激となり、学生の約30パーセントが「グループワークの合奏曲をマスターする」を事後学習の内容としていた。

回	授業内容
第9回	音楽を作って表現できるようにする。

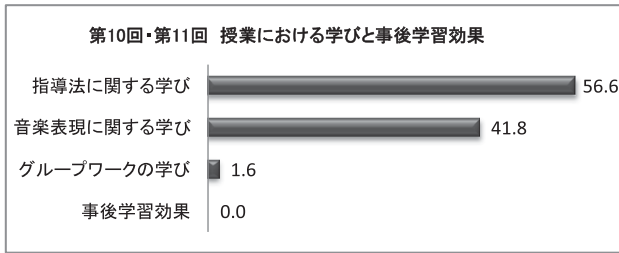


「他のグループの発表を聴くと新しい学びがある」と学生の約55パーセントが指摘している。この授業が、グループワークの学びが一番多い授業となった。



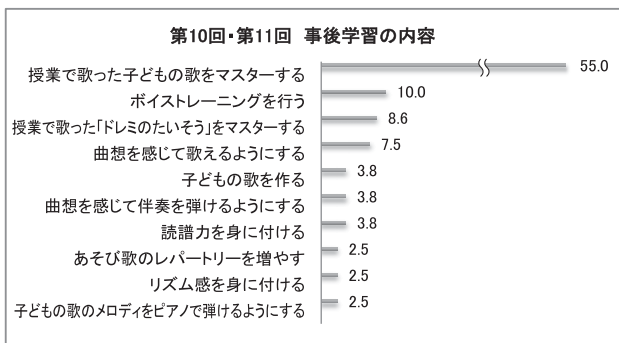
合奏に関しての意見交換、合奏のグループワーク、発表の順に授業を行った。学生の約49パーセントが「グループワークの合奏曲をマスターする」ことを事後学習の内容としていた。第11回の授業までに子どもの歌を作るという課題を課したので、子どもの歌作りに関する事後学習の回答もあった。

回	授業内容
第10回	児童教育コースⅠ： 歌唱教材についてⅠ 低学年の歌唱教材
第11回	幼児保育コースⅠ： 日本の子どもの歌 児童教育コースⅡ： 歌唱教材についてⅡ 中学年・高学年の歌唱教材 幼児保育コースⅡ： 世界の子どもの歌



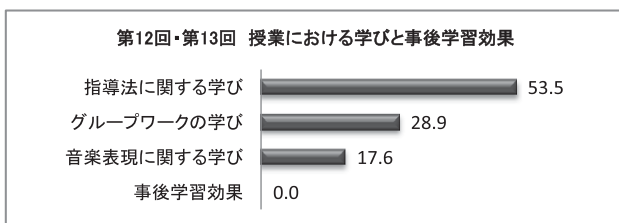
第10回から児童教育コースと幼児保育コースのコース別授業となった。「歌うこと」という同じテーマの授業内容であったので、第10回と第11回をまとめた小レポートの提出とした。

新曲をグループワークで歌えるようにするという課題を授業で行った。「グループで音取りをするとしっかり歌おうという意識が生まれる」というグループワークの学びの記載があった。



両コースともに、歌う課題を課したので「授業で歌った子どもの歌をマスターする」が事後学習の内容の過半数を占めた。

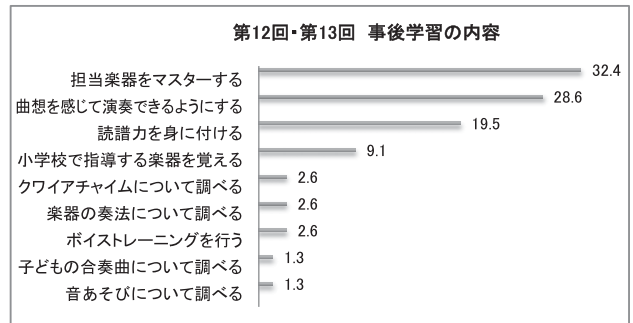
回	授業内容
第12回	児童教育コースⅢ： 器楽教材についてⅠ 低学年・中学年の器楽教材
第13回	幼児保育コースⅢ： 楽器と音楽 児童教育コースⅣ： 器楽教材についてⅡ 高学年の器楽教材 幼児保育コースⅣ： 子どもと一緒にできる音あそび



「楽器」という同じテーマの授業内容であったので、第12回と第13回をまとめた小レポートの提

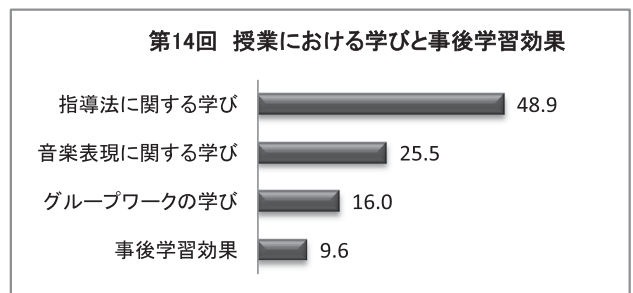
出とした。

第13回の授業では、両コースともにクワイアチャイムやハンドベルの紹介を行った。奏法のレクチャー後に、グループワークで演奏を試みた。



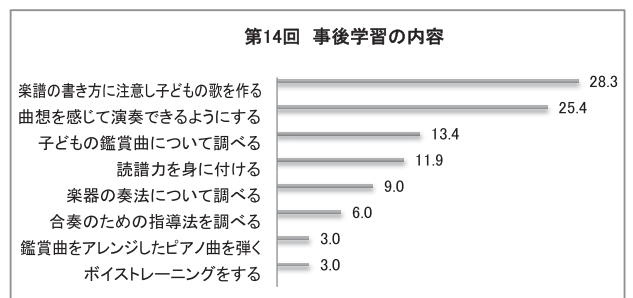
クワイアチャイムやハンドベルはクリスマスでよく聴く楽器であるが、演奏は初めての学生が多く楽器を鳴らすタイミングに難しさを感じたようだった。第13回の発表で終了予定の授業計画であったが、予想以上に時間を要したことや学生からの要望もあり、第14回にクワイアチャイムの発表を行うことになった。

回	授業内容
第14回	児童教育コースⅤ： 鑑賞教材について 幼児保育コースⅤ： 聴く活動について



指導法に関する学びでは、鑑賞曲の指導法についての学びが多かった。

学生の要望から、クワイアチャイムの発表を延



期した。しかし、小レポートを通して「事後学習の効果が、演奏できるようになった」ことが分かった。難しく思えたものが出来上がると達成感に繋がることも分かった。

学生の作った子どもの歌を返却し、作曲の様々なルールについて説明した。また、子どもにも歌ってほしいと思われる提出作品をプリントして歌った。その結果、学生の約30パーセントが「もう一度、子どもの歌を作る」ことを事後学習の内容としていた。

授業最終日に、「授業を通して気づいたことは何か?」「小レポートを書く時に気をつけたことは何か?」「小レポートを書くことによって、授業を受ける姿勢に変化はあったか?」「グループワークを通して気づいたことは何か?」についてコメントを求めた。その結果が次である。

授業を通して気づいたことは何か?

- 1 子どもが興味・関心を持つ指導や教材選択が大切である。 14名
- 2 音楽は歌うこと、演奏すること、聴くこと、身体を動かすことなど幅広い。 11名
- 3 音楽は楽しい。自然に笑顔になる。 10名
- 4 音楽は一体感を感じることができる。 8名
- 5 楽器には様々な奏法がある。 7名
- 6 範唱には歌詞、メロディ、リズム、曲想を子どもに伝える重要な役割がある。 6名
- 7 合奏は周りの音を聴く必要がある。 6名
- 8 ボイストレーニングは継続学習が大切である。 5名
- 9 音楽は感性を豊かにする。 4名
- 10 事後学習が大切である。 3名

小レポートを書く時に気をつけたことは何か?

- 1 文章は分かりやすく簡潔に、字は丁寧に書く。 26名
 - 2 様々な課題に取り組んで得られた学びを書く。 18名
 - 3 事後学習の内容は学びの中から深めたいことを書く。 11名
 - 4 事後学習の内容は一週間で達成可能なものとする。 10名
 - 5 感想にならないように学びを書く。 4名
- 事前にシラバスの授業内容を確認し、

- 授業後、振り返りながら書く。 4名
- 7 2つ以上の学びを書く。 1名
- 小レポートを書くことによって、授業を受ける姿勢に変化はあったか?

- 1 授業における学びや事後学習の内容を書くという目的があるので、意欲的に授業を受けた。 37名
- 2 授業内容を文字化して振り返ると理解が深まり、授業態度も変わった。 26名
- 3 事後学習に取り組むことによって苦手な能力を克服することができ、授業態度も変わった。 8名
- 4 担当教員のコメントや質問への答えがあると励みとなり、授業態度も変わった。 3名

グループワークを通して気づいたことは何か?

- 1 協力して合奏することができた。 36名
- 2 表現方法の話し合いが活発にできた。 19名
- 3 新曲の譜読みは、協力して行うことができた。 10名
- 4 音楽の楽しさを分かち合えた。 6名
- 5 表現方法の話し合いが消極的であった。 2名
- 6 協力して合奏することができなかった。 1名

このように、小レポートが授業に効果的に働いたことが明らかになった。また、「グループワークを通して、協力して合奏することができた」など、他者と協働して音楽表現を生み出すことができたことも分かった。しかし、少数ではあるがグループワークが消極的であったグループも見受けられたので、グループ構成・進め方などの改善が必要であることが分かった。

Ⅳ おわりに

今回は、「音楽」の授業で行っている小レポートを通して、「授業における学びと事後学習効果」、「事後学習の内容」について論じた。事後学習を課すならば、学習効果があったかどうか学生自らが確認できるように授業の中での配慮が必要である。

難しく思えたものが出来上がると達成感となる。この積み重ねこそが主体的学びに繋がる。

今後の課題として、表現者である子どもと子ど

もの表現を支える保育者、小学校教諭の両面からさらに検討していきたい。

〈注・引用文献・参考文献〉

- 1) 文部科学省「幼稚園教育要領」2008
- 2) 厚生労働省「保育所保育指針」2008
- 3) 内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」2014
- 4) 前掲「幼稚園教育要領」2008、13頁
- 5) 前掲「幼稚園教育要領」2008、18頁
- 6) 文部科学省「小学校学習指導要領解説 音楽編」2008、7頁
- 7) 前掲書「小学校学習指導要領解説 音楽編」2008、7-11頁
- 8) 授業の第4回～第6回は非常勤講師が担当のため、小レポートは課していない。また、第15回は和楽器(琴・和太鼓)の特別講師が担当のため、小レポートは課していない。